

一般選抜（Ⅱ期）

九州ルーテル学院大学  
2026年度 一般選抜（Ⅱ期）  
試験問題

総合問題（国語領域）

2026年3月3日（火）実施

一 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

人がほんとうに大事なことを話すとき、その「大事なこと」は初めから、言語的に明快に分節されたアイデアとして存在しているわけではない。それでも、その大事なことについて語り始めると、しばしば次のようなことを経験するだろう。語っている最中に、自分でも思ってもいなかった言葉が出てきて、「私の言いたかったことはまさにこれだった」と自分で発見する、ということ、である。思考があつて、それが言語として外化されているのではなく、語ることを通じて、思考が明晰めいせいなものとして形成されることがあるのだ。

たとえば哲学者のバートランド・ラッセルは、書簡の中で次のようなことを述べている。自分がオットライン・モレル夫人を愛していたということを、彼女への愛を告白している自分自身の語りを聞いたときに初めて知った、と愛への明晰な自覚があつて告白したのではなく、気づかぬうちに愛を語っている自分の声を聞いて、自分のその女性への愛を初めて発見した、というわけだ。

私たちが語ることでそれ自体に真の意味を感じ、語ることに喜びを感じるの

A

は、このようなどきであろう。まさに語ったことを媒介にして、  
とき。こうしたことは、話し言葉だけでなく、書き言葉においても生ずる。書いていると、執筆前には予定していなかった言葉、思いついてさえいなかった言葉が出てくることもある。自分が書いてしまったことを通じて初めて、自分が本来書きたかったことが何であったかを自覚する。こうした発見にこそ、書くことの快楽がある。私自身が書く理由も実のところこの点にある。私は、事前に細かく構想を練ってから執筆にとりかかる方ではあるが、それでも、まさに書き続けることを通じて、書くべきだったこと、書きたかったことを発見している。そのような発見の喜びがなければ、わざわざ

書くことはなかっただろう。

フランスの哲学者ルイ・アルチュセールは、フランス語の *prise* (掴むつかこと) と *surprise* (驚き) という二つの語の間を a 戯れつつ、今ここで述べているようなタイプの「言語をめぐる経験」を記述している。すなわち、あるアイデアを掴む (*prise*) 者は、自分が成し遂げてしまったことに驚かされる (*surprise* させられる) のだ、と。

自分の口から出た言葉、自分の指が書きつけた文字に驚かされる? とすると、ここで奇妙なことが起きていることになる。私を驚かせているその言葉、その文字は、私の身体から発せられているのに、他者——誰とも特定できない他者——に帰属しているかのように感じられているのだ。あたかも、(不定の) 他者が、私の身体を通じて、語り、書いているかのような感覚が生じていることになる。

それにもかかわらず、つまりその言葉は、私にコントロールされた私の言葉ではなく、まるで他者の言葉であるかのように感じられているにもかかわらず、私の **b 内奥** の真実、私が本来言いたかった真実を言い当てているとも感じられている。ここにあるのは、他者性と自己性の間の短絡である。

動詞のいわゆる **1 中動態** *middle voice* が指し示しているのは、以上のような経験である。この経験は能動態 *active voice* では記述できない。つまり、私自身がその言葉を意図的に制御しているように感じられない。しかし、受動態 *passive voice* にも相応しくない。つまり、私は何か外部のものに強いられて語っているわけではない。能動態でも受動態でもない中動態こそ、今述べているような言語についての体験にふさわしい。

現在のヨーロッパの諸言語からは消え去ってしまったが、古代のインド・ヨーロッパ語には、能動態でも、受動態でもない動詞の相、中動態があった。それは、「形の上では受動態だが、意味的には能動」となる動詞だ。ここで見ている現象が、まさにこの通りである。「私が語っている」と、能動態で言うほかないのだが、しかし、私自身には、それが受動態の相で体験されて

もいる(自分ならざる者に語らされているかのように感じられている)。

中動態的なやり方で、人は、まさに自らが言うべきことを見出す。それは、まぎれもなく私の言いたいことであつたはずなのに、他者性を帯びている。いや、その他者性こそが逆に、語られていることがほかならぬこの私にとつての真実であることの証にすらなっているのだ。

なぜ、言語をめぐるこのような経験について説明してきたのか。私たちが、生成AIを日常的に活用するようになったとき、このような体験は、私たちの生活の中から徐々に失われていくだろう、と推測されるからである。

2 言語をめぐる中動態的経験は、生成AIとの「会話」の経験に、いわば植民地化されてしまうのだ。どうして、そのように予想するのか。それは、二つの経験がある意味で似ているからである。「ある意味で」と述べたのは、両者はまさに「似て非なるもの」だからだ。確かに似ている。しかし違う。

あなたが、どうしても伝えたい、どうしても言いたい何かがあるのだが、適切な言葉が見つからず、それを具体的に表現することもできず、苦勞していたでしょう。そこであなたはChatGPTのような生成AIに、<sup>c</sup>バクゼンとした状況だけを教え、代わりに書いてもらおう。たとえばあなたは、つい先日出会ったある人物に、今までに感じたことのないような複雑な思いを抱き、それを伝えたいのだが、よい言葉が見つからない。ChatGPTへの質問文の中に、その人物とあなたとの関係や出会いの状況などを書き入れておけば、ChatGPTは、きっと巧みなラブレターを数秒で書いてくれるに違いない。あなたは、自分が書いてもこんなふうには書けないだろうと感じ、それを「私の手紙」としてその人物に送るだろう。

ひとたび生成AIから回答をもらってしまえば、人はその段階で、自分の定かならぬ思考、自分の語りがたい感覚を、何としてでも言葉にしようとする努力を、<sup>d</sup>ホウキしてしまうだろう。生成AIの回答で十分だ、それこそが私が思っていたことだ、ということにしてしまうからだ。(中略) 私が、何とか言いたかったアイデアを「掴んだ (prise)」と思うとき、言葉は、

まるで他者からやって来たかのように感じられている。そして今、生成AIを使ったときにも、言葉は、ほんとうに他者からやって来ている。目の前にあるこの機械から、である。人間の心理に本来、他者からやって来たかのように感受される言葉をこそ、「私のもの」として反転して受け取る傾向性があるがために、人は、機械という他者から出て来た言葉を「私のアイデア」として採用することにさしたる抵抗を覚えない。

人間の思考の自律性、思考の自由は、能動的なものではなく、中動(態)的なものである。外(他者)からやって来たと感じられる言葉を通じてこそ、「私の思考の真実」が表現される。だが、中動態的な経験は、容易に受動態へと転化してしまう。このことが、生成AIの影響に対する人間の脆弱性<sup>e</sup>の究極的な原因となっている。自律性がもともと中動態的な構成をもつがゆえに、人間の思考は、生成AIに受動的に影響され、その回答に誘導されやすいのだ。

だが、<sup>3</sup>本来の中動態的な言語経験と生成AIをめぐる言語経験とでは、根本的な違いがある。前者における、「語り得た」ときの究極の喜びは、後者からは得られないだろう。真に語り得たこと、語りに値することは、もともと語り得たこと、語り得ないことであつた。それを何とか言葉にしようとすれば、非常な苦しさを味わわなくてはならない。ときには諦め、沈黙の方へと撤退する。しかし何とか語り得たとき、満足できる水準の言葉が得られたとき、人は、自分で自分に驚くとともに、強い喜びを感じるだろう。しかし、生成AIに文章を作ってもらったときには、そうした感情はまったく得られない。生成AIに流暢なラブレター<sup>f</sup>を書いてもらったり、そつがないエッセイを書いてもらったりしてうれしいと思うかもしれない。が、それは、あの「語り得た」というときの爆発的な喜びに比べようもない。こうした違いはどうして生ずるのか。喜びの原因となっている機制は、他者性と自己性の短絡にある。私の中にはもともとない、外(他者)からやってきた言葉が、しかし、私の内的な真実を言い当てていると納得した

ときの眩暈<sup>めまい</sup>がするような感覚が、歓びをもたらしている。疎遠であることと内密であることとの通底が、歓びの源泉だ。

生成 AI に書かせたときには、こんな極端な短絡は生じない。人は、生成 AI が書いたこと(の一部)を、「私のエッセイ」「私の企画書」「私の手紙」等として他人に提示するかもしれないが、しかし同時に、これを書いたのは私ではなく、この機械の方であるという冷めた認識ももち続けるからだ。

生成 AI への人々の態度は、アイロニカルな没入の一種である。

「アイロニカルな没入」というのは、私の造語だが、「そんなことは分かっている、けれども……」という形式でなされるコミットメントのスタイルである。たとえば、人は、死後の魂や世界など存在しないと書いていても、故人の冥福を祈る。同様に、その文章は生成 AI によって作られたものである、私はそれをよく分かっている。しかし、同時に、まるで自分の手柄であるかのようにそれを誇ったりする。

自己性と他者性の短絡が生じていないということは、生成 AI が作った文章が不適切であったり、否定的な結果をもたらしたりしたときに人が感じる「責任」の感覚の中に、e ケンチョに現れる。たとえば生成 AI が書いたラブレターによって、4 案に相違して、相手がひどく怒ったり、傷ついたりしたとしよう。そのとき、人は、そのことにどのくらいの罪の意識を感じるだろうか。そのとき人は、(より)悪いのは私ではなく、機械の方だ、と思うだろう。生成 AI の失敗の責任を全面的に負おうとは思うまい。

繰り返そう。5 生成 AI が人間の生活の中に浸透すればするほど、人間の言語をめぐる経験の中で「最も美しい瞬間」を享受する機会は、失われていくだろう。そうした機会が、生成 AI をめぐる体験によって駆逐されてしまうのだ。やがては、それが失われた、ということさえも自覚できないところまで行くかもしれない。

(大澤真幸『生成 AI 時代の言語論』による)

出題の都合上、一部編集した箇所がある。

問一 二重傍線部 a ～ e について、漢字は平仮名で、カタカナは漢字で書け。

問二 空欄 A に当てはまる言葉として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選び番号で答えよ。

- ① 自分の思考を分節する
- ② 自分の思考を創造する
- ③ 自分の思考を伝達する
- ④ 自分の思考を発見する
- ⑤ 自分の思考を外化する

問三 傍線部 1 「中動態」とはどのようなものか。その説明として適当でないものを、次の①～⑤の中から一つ選び番号で答えよ。

- ① 私の語りであるのに、私の身体を通して他者の言葉のように感じられるもの。
- ② 形の上では受動態だが、意味の上では能動態のもの。
- ③ 自分が書きたかったことを見出す契機となるもの。
- ④ 言いたいことが他者性を帯びていることで、自分にとっての真実性を証明するもの。
- ⑤ 自分がその言葉を意図的に制御していると感じられるもの。

問四 傍線部 2 「言語をめぐる中動態的経験は、生成 AI との『会話』の経験に、いわば植民地化されてしまう」とあるが、それはなぜか。その原因として最も適当な部分を、「～から」に繋がるように本文中から二十五字以内で抜き出せ(読点も一字とする)。

問五 傍線部3「本来の中動態的な言語経験と生成AIをめぐる言語経験とは、根本的な違いがある」とあるが、それはどのような違いか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選び番号で答えよ。

- ① 中動態的な言語経験においては、考えてもいなかったことを確かな言葉によって語り得たと納得したとき究極の喜びを感じるが、生成AIをめぐる言語経験では、思っていることの全てが表現された実感が持てず、うれしいと思うに留まる。
- ② 中動態的な言語経験においては、語ろうとしていたことを他者の提案する言葉によって語り得たと納得したとき究極の喜びを感じるが、生成AIをめぐる言語経験では、表現されたものに対して責任を感じることができず、自分で書いたという喜びを味わうことはできない。
- ③ 中動態的な言語経験においては、元々語るつもりがなかったことを無意識のうちに語ってしまったと納得したとき究極の喜びを感じるが、生成AIをめぐる言語経験では、機械によって書かれているという認識から逃れることができず、表現する喜びを味わうことはできない。
- ④ 中動態的な言語経験においては、語るべきことを他者の言葉によって語り得たと納得したとき究極の喜びを感じるが、生成AIをめぐる言語経験では、自己性と他者性の短絡が生じて、楽に文章を完成できたことに対して良かったという気持ちにしか味わえない。
- ⑤ 中動態的な言語経験においては、外からやってきた言葉によって私的内的な真実が言い当てられたと納得したとき究極の喜びを感じるが、生成AIをめぐる言語経験では、書いたのは機械であるという認識から逃れることができず、書いてもらってうれしいという感情に留まる。

問六 傍線部4「案に相違して」とあるが、この言葉と置き換えても文意が変わらないものを、次の①～⑤の中から一つ選び番号で答えよ。

- ① 吟味の上
- ② 案の定
- ③ 予期せぬことに
- ④ 結果として
- ⑤ 不服なことに

問七 傍線部5「生成AIが人間の生活の中に浸透すればするほど、人間の言語をめぐる経験の中で『最も美しい瞬間』を享受する機会は、失われていくだろう」という筆者の主張に対してあなたはどうか考えるか。また、その結果どのようなことが起こると考えるか。「最も美しい瞬間」を明らかにしながら、あなたの考えを二〇〇字程度で述べよ。

九州ルーテル学院大学  
二〇二六年度 一般選抜（Ⅱ期）試験

総合問題（国語領域）解答用紙

受験番号							

得点	
----	--

解答欄																																																																																																																											
問七										問五	問四	問二	問一																																																																																																														
<table border="1"> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> </table>																																																																																																																								問六	から	問三	a
れ																																																																																																																											
b																																																																																																																											
c																																																																																																																											
d																																																																																																																											
e																																																																																																																											

二〇二六年度 一般選抜（Ⅱ期）試験

総合問題（国語領域） 出題の意図・解答例

■出題の意図

大学入学後の学習の素地となる国語の力を問うことをねらいとし、以下の問題を設定した。現代文においては、長文の論旨を的確に読み取る知識・技能を問うと共に、自身の経験と結びつけて論理を組み立てる、思考力・判断力・表現力を問う。

■解答例

一 大澤真幸 『生成AI時代の言語論』

問一 a たわむ b ないおう c 漠然 d 放棄 e 顕著

問二 ④

問三 ⑤

問四 中動的な経験は、容易に受動態へと転化してしまう から

問五 ⑤

問六 ③

問七 〈解答例〉

生成AIが生活に浸透することで、自力で語り、書くことを通じて自身の内奥の真実を発見する喜びが失われるだろうという筆者の危惧に私も同意する。その結果、私たちは、自分の中にある無自覚の深い思考に到達できなくなってしまう、浅い考えによって社会生活を営むことになるだろう。最終的には、人間の思考力は衰え、AIへの依存度はますます高まり、社会全体が生成AIの出力する言葉によって動かされてしまう時代が到来するのではないかと考える。